

石棒の聖地 塩屋を掘る

幸せを祈っていたんだ！縄文人も。

飛騨市美術館

ごあいさつ

ここに平成 29 年度企画展「縄文の聖地 塩屋を掘る」を開催いたします。

はるかむかしの縄文時代、現在の信仰や宗教はなかった時代です。しかしながら、発掘調査で見つかる土器や石器には、生活用具ではない儀礼や祭祀に用いられたであろう遺物が出土します。縄文人も我々と同じように、目に見えぬ何かを畏れ、いのり、願っていたのでしょうか。

飛騨市宮川町塩屋では、縄文時代に塩屋石で祭祀具とされる石棒を製作していた遺跡が見つっています。そこで見つかる石棒からは一種のオーラのようなものが感じられ、一つひとつの遺物にこめられた作り手の想いを感じずにはられません。

今回の企画展では、塩屋石で作られた石棒に焦点をあて、そこから縄文人の祈りや願いに迫ります。我々の生活につながっている縄文人の想いを感じていただければ幸いです。

最後に、この企画展の開催にあたり、深いご理解と多大なるご協力を賜りました関係者・関係機関の皆様に、心からお礼申し上げます。

平成 29 年 9 月

飛騨市美術館長

凡例

1. 本書は、平成 29 年 9 月 30 日から 11 月 12 日を会期とする企画展 「石棒の聖地 塩屋を掘る」の展示図録です。
2. 本展の開催ならびに図録作成にあたり、下記の方々と機関からご協力を賜りました。
岡本東三、押井正行、神保孝造、戸田哲也、林直樹、的場茂晃、山下清和、山田厚真
魚津市教育委員会、郡上市教育委員会、高山市教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、
飛騨市立さくら保育園、飛騨市立増島保育園
3. 展示資料の所蔵者・保管者は目録に明記しました。
4. 本書の校正は展示構成に沿っていますが、図録掲載順はこの限りではありません。
5. 本書の概要は調査機関の報告書等によります。
6. 本書の執筆・編集は、三好清超（飛騨市教育委員会事務局文化振興課）が行いました。



塩屋石の露頭

柱状に割れる「塩屋石」と2つの石棒製作遺跡

飛騨市宮川町には、町内を縦断する形で神通川の支流宮川が流れている。宮川によって形成された深いV字谷には無数の谷川が流れ込んでおり、扇状地状に堆積した段丘が点在する。その河岸段丘上に集落が立地し、塩屋もそうした集落の一つである。

塩屋の谷川沿いをさかのぼると「塩屋石」の岩盤があらわれる。塩屋石は、地質学の用語では黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩くろうんもりゅうもんがんしつようけつぎょうかいがんという。この岩石は柱のように縦に割れやすいという性質がある。これを柱状節理ちゅうじょうせつりと言う。その特徴を熟知し、塩屋石を石棒へと形をかえたのが縄文人である。

石棒とは、縄文時代前期に出現し弥生時代初めまで使われた、男根状のふくらみを持つ祭祀の道具である。縄文時代中期には大型化し2mを越えるものが作られる。一方、後期になると50cmほどに小型化し、さらに晩期になると冠の形に似た石冠などへと姿を変える。この変化は縄文人の思想が時代とともに変遷したためと考えられている。

塩屋では中期・島遺跡、後期・塩屋金清神社遺跡の2つの石棒製作遺跡が見つまっている。島遺跡では川沿いで少数の大型石棒を、塩屋金清神社遺跡では山麓で大量の小型石棒が作られていた。この2つの遺跡から、縄文人の祈りの変遷を覗いてみたい。



宮川町塩屋と遺跡の立地

しま

島遺跡の石棒

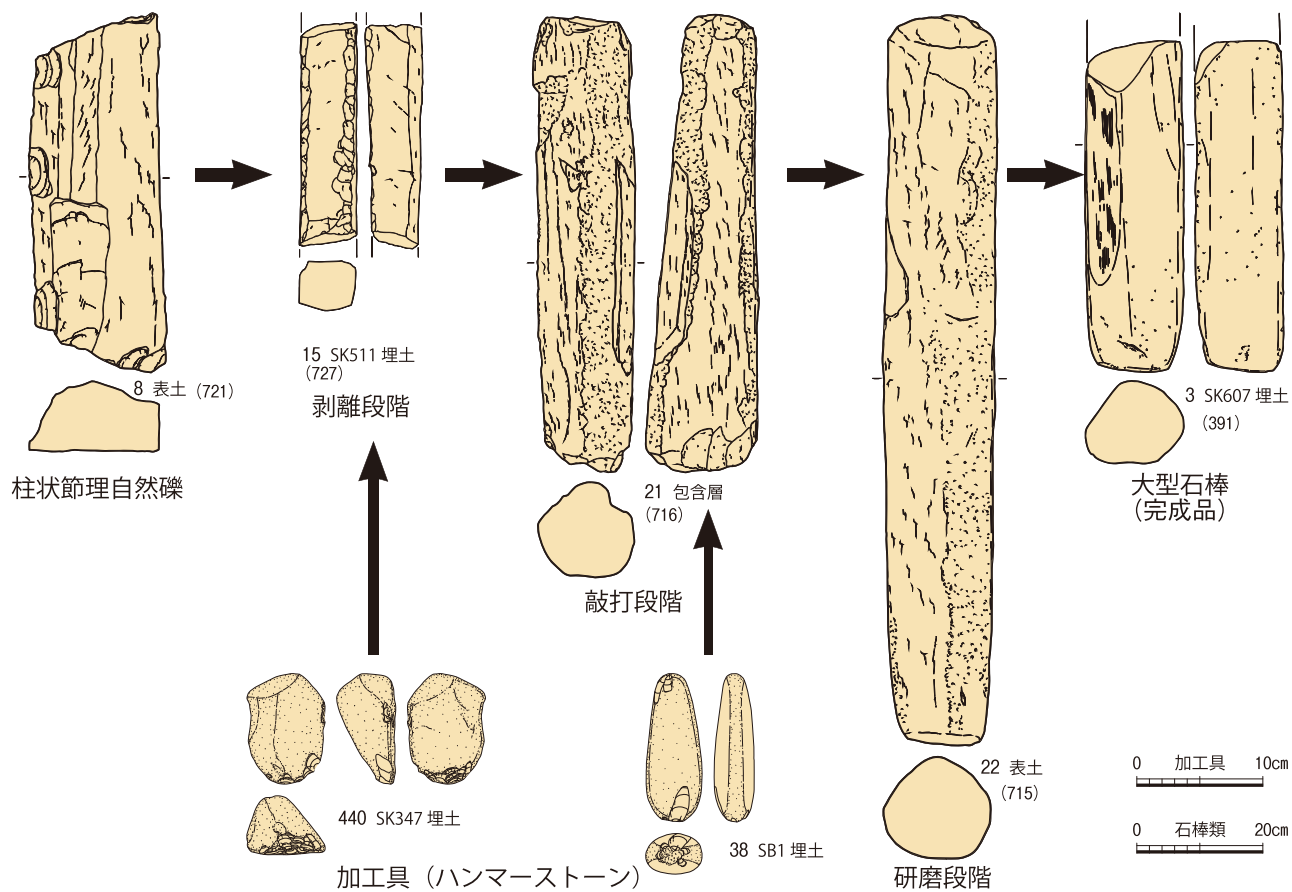
島遺跡は縄文時代中期中葉～後葉（約 4,500 ～ 4,000 年前）に営まれた集落跡である。遺跡西側に、宮川に向かって張り出す形で半弧状に竪穴建物跡 26 軒が連なる。東側からは廃棄土坑群、土坑群の内側に立石群が検出され、中央には広場が設けられている。

発掘調査では、大型石棒の完成品と未成品が見つかり、石棒を作っていた遺跡であることが判明した。また、未成品からは自然石のカドをそぎ落とす剥離、何千回と敲いて丸みや括れを作る敲打、磨き上げる研磨という工程を経て石棒になることが明らかとなった。これらに加え、島遺跡では塩屋石を立たせた状況や埋めた縄文土器に塩屋石で蓋をするなど使用した様子も見つかっている。さらに研磨の工程まで済した石棒の完成品は 3 点見つかった。うち 2 点は、他の石とともに廃棄された状態で見つかった。一つは火を受けた痕跡があり、もう一つは磨かれた痕跡が残る。これら受熱や研磨の痕跡は、祈りの行為か廃棄の行為に伴うものであろう。つまり、石棒が廃棄された状態で出土したのだ。縄文時代中期の石棒製作遺跡・島遺跡では、石棒を作り、使い、最後に捨て去っていたのである。

塩屋の縄文人は自ら大形の石棒を作り、使い、捨て去ることで役目を終えさせていたのだ。



島遺跡の大型石棒（中央の最大のものが長さ 116cm）



島遺跡における石棒製作工程図



廃棄され役目を終えた石棒



塩屋石の立石



埋めた縄文土器に塩屋石で蓋をする状況



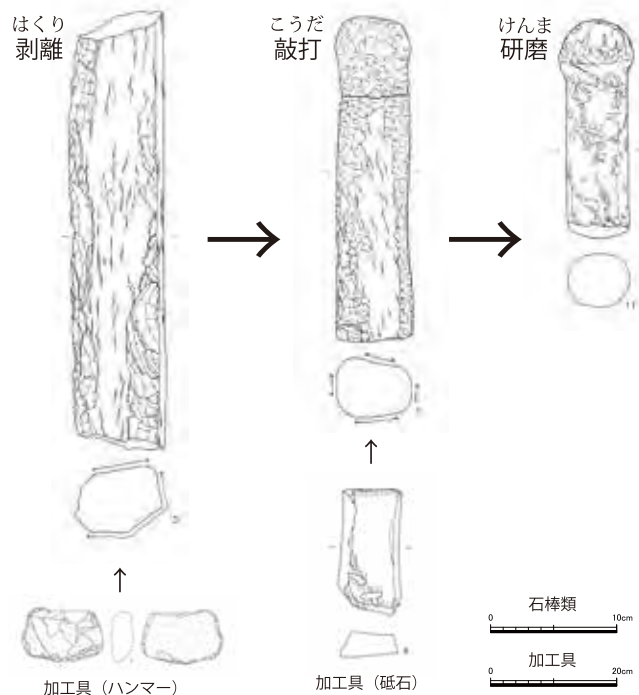
埋めた縄文土器に塩屋石で蓋をする状況

しおやきんせいじんじゃ
塩屋金清神社遺跡の石棒

塩屋金清神社遺跡では工房の跡は見つからなかったものの、谷を埋めた土砂から 1,074 本もの石棒と未成品が見つかった。出土土器から縄文時代後期（3,500 年前）に石棒づくりのピークを迎えたことが分かる。また、石棒を加工した時に使われたハンマーや砥石^{といし}、加工の際の石くずも出土している。

一つの縄文遺跡での出土量を凌駕する数の石棒が見つかり、これらから製作工程を追えることができ、さらに加工具も出土しているため、石棒製作の工房があったことは間違いないであろう。さらに後期後半から晩期にかけての祭祀道具^{せっかん}であり、冠に似ていることから石冠と名づけられた石器なども出土しており、石製品は製作され続けたようである。

なお、この遺跡が全国に知られたのは今から 100 年以上も前の明治 24 年のことである。東京人類学会雑誌に「塩屋の石棒」が紹介されている。



塩屋金清神社遺跡における石棒製作工程図



発掘調査の様子



説明会の様子



石棒の出土状況



剥離工程

石のカドをたたいてはがす



敲打工程

何千回とたたいて石のカドをつぶし、丸みや括れを作る



石棒

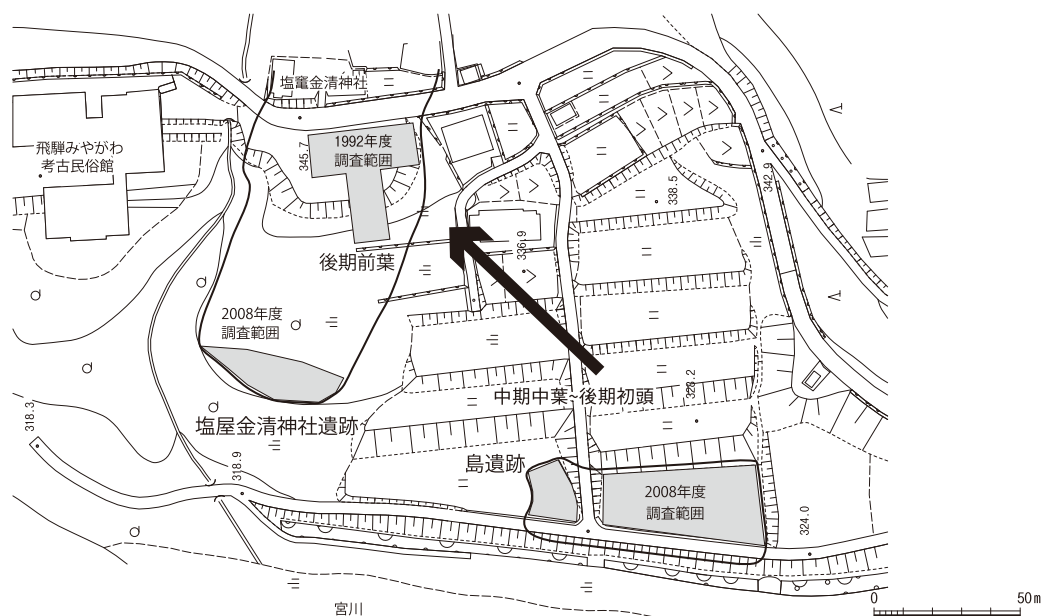
みがいて仕上げた完成品

塩屋石製石棒の分布と製作地の移動

塩屋で作られた石棒は、縄文時代中期のものが6遺跡、後期のものが8遺跡で見つっている。島遺跡22本に対し、塩屋金清神社遺跡では1,074本もの石棒が製作されているものの、分布する遺跡数はともに少ない。また、島遺跡は宮川沿い、塩屋金清神社遺跡は山のふもとに立地する。製作された数量と立地に相違が認められるのだ。今一度、製作工程と立地をみて、この課題を考えたい。

島遺跡では、石材を得やすい山中で剥離と敲打の工程を済ませ、島遺跡や宮川周辺に素材を持ち込んで研磨工程を行っていた。そして完成後、遺跡で使用するとともに他の遺跡に宮川の水運で運んだのであろう。一方、塩屋金清神社遺跡は100m上流に位置する。これは石材を入手しやすい場所で研磨工程まで行うことを選んだ結果であろう。つまり、大量の石棒を製作するために研磨工程まで一貫して作業しやすい場所を選ぶ必要があり、結果として安定した沢水を利用しやすい山麓へ移ったのである。また、後期の石棒が製作数に対して流通していない事実は、流通ではなく製作自体が目的になっていたからと考えられる。

島遺跡では遺跡地での使用と他地域への流通のために製作したのに対し、塩屋金清神社遺跡では製作自体が目的となっていたのであろう。祭祀の道具とされる石棒であるが、中期と後期ではその使用等に大きな相違点があるのだ。このことは、塩屋石の石棒分布と塩屋の2つの石棒製作遺跡の立地が示す重要な成果である。なお、後期以降の遺物と考えられる石冠や石刀、御物石器なども塩屋金清神社遺跡で若干製作され、飛騨市の宮ノ前遺跡や郡上市の店町遺跡で出土している。



島遺跡と塩屋金清神社遺跡の位置図



魚津市天神山遺跡の石棒



飛騨市寺林遺跡の石棒



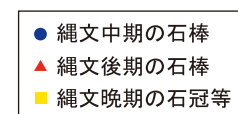
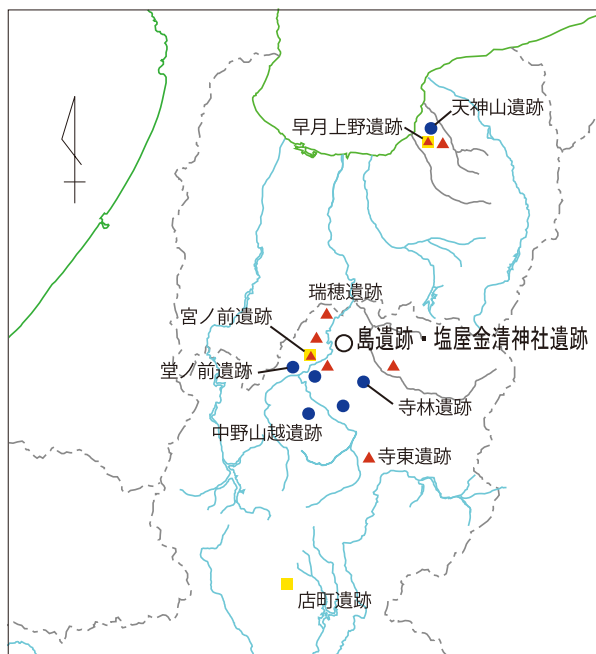
高山市寺東遺跡の石棒



飛騨市寺林遺跡の石棒



郡上市店町遺跡の石冠



塩屋石製石棒の分布図

さわ 沢遺跡とさわしき ど き 沢式土器

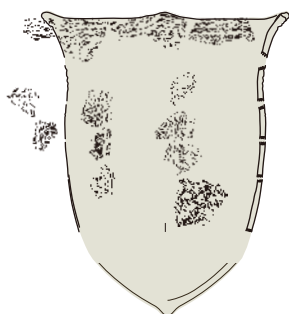
概要

沢遺跡は県立吉城高校の裏山、飛騨市古川町上気多字沢の山麓の斜面に立地する。縄文時^{そうき}代早期、今から 9,000 ～ 6,000 年前の遺跡である。この早期を代表する縄文土器を「押型文^{おしがたもん}土器」と言う。押型文とは、鉛筆ぐらゐの太さの棒に山形・楕円・格子目などの文様を刻み、土器の表面を転がして凹凸を連続してつけたものである。

沢遺跡は昭和 39 年（1964）の大野政雄氏による予備調査を経て、昭和 42（1967）年に佐藤達夫氏・大野氏により発掘調査が実施された。主として押型文土器が出土し、佐藤氏により^{おび}帯状に押型文を施文することや楕円押型文が少ないことなどから、「沢式土器」として東日本系押型文の最古段階に位置づけられた。昭和 61 年（1986）には、大野氏と岡本東三氏を中心に多くの研究者が参加して発掘調査が実施された。その後、最初の発掘調査から半世紀を経た平成 29 年 3 月、岡本氏・戸田哲也氏を中心に報告書がまとめられた。

沢式土器の特徴

飛騨地域で押型文土器が出土する遺跡は 100 ケ所ほどで、うち沢式土器が約 30 ケ所で出土する。山形押型文が主体であり、少量の格子目・結節縄文を伴う。高山市はつや遺跡では魚骨文もある。口縁部が外反し、胴部が膨らみ尖底する深鉢で、器壁は 4 ～ 5mm と薄い。帯状に文様は施される。なお、沢式土器を特徴づけるものとして、出土した土器の大半に黒鉛^{こくえん}が混入することがある。黒鉛は飛騨市河合町^{あもう まんなみ}天生や宮川町万波など飛騨北部で産出し、意識的に使用された。当時の交易範囲を知る上で重要な研究対象になっている。



重要文化財「岐阜県中野山越遺跡出土品」

中野山越遺跡は、古川町中野字山越の緩斜面に立地する。縄文時代中期、今から 4,500 ～ 4,000 年前を中心に人々の生活が営まれた遺跡である。この縄文時代中期は、前時期の縄文時代前期より格段に遺跡数が増える時期である。飛騨地域では早期・前期の竪住居跡が 30 軒程度しか発見されていないのに対し、中野山越遺跡だけで中期の住居が 28 軒を数える。人口が増加した時代なのである。

縄文土器と石器も大量に出土している。土器は、北陸系・信州系・東海系などと呼ばれる周辺各地域の特徴的な文様が入り入れられ、活発な交流があったことを物語っている。これらは中期中葉・中期後葉・中期末葉の 3 時期に分けられる。

中期中葉段階では在地系と信州系が主体に、後葉段階では信州系と北陸系が主体に、末葉段階では在地系の土器が主体となる。このように、各地域とのつながりを示す文様を持つ土器が出土するあり方が「飛騨地域における縄文時代中期の典型的な組合せを示している」として平成 8 年に重要文化財に指定された。飛騨地域は、東西の文化や日本海側と太平洋側の文化の結節点であるが、周辺地域の多彩な文様を持つ縄文土器はそれを裏付けるものである。なお、重要文化財の指定品になっている大型石棒は塩屋石製である。





主な展示品

- | | |
|-------------------|------------------|
| ○堂ノ前遺跡の彫刻石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 島遺跡の石棒と未成品 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 島遺跡の石棒加工具 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の石棒と未成品 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の石棒加工具 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の御物石器・石冠 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 天神山遺跡の石棒 | 魚津市教育委員会 蔵 |
| 寺林遺跡の彫刻石棒 | 高原郷土館 蔵 |
| ○宮ノ前遺跡の小型石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○家ノ下遺跡の石棒・石冠 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 瑞穂遺跡の石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 寺東遺跡の小型石棒 | 高山市風土記の丘学習センター 蔵 |
| 寺林遺跡の小型石棒 | 個人 蔵 |
| 小糸尾萩野遺跡の小型石棒 | 富山県埋蔵文化財センター 蔵 |
| ●早月上野遺跡の小型石棒 | 富山県埋蔵文化財センター 蔵 |
| 早月上野遺跡の石冠 | 富山県埋蔵文化財センター 蔵 |
| 店町遺跡の石冠 | 郡上市教育委員会 蔵 |
| ◎沢遺跡の押型文土器（沢式土器） | 飛騨市教育委員会 蔵 |
| 岐阜県中野山越遺跡出土品 | 飛騨市教育委員会 蔵 |

◎国重要文化財、○岐阜県重要文化財、●国登録有形文化財

—平成 29 年度企画展—

石棒の聖地 塩屋を掘る

発 行 日 平成 29 年 9 月 30 日

編集・発行 飛騨市美術館

〒509-4221

岐阜県飛騨市古川町若宮二丁目 1 番 58 号

印 刷 毎日印刷社